こしをれ

亮遠

法主猊下の七十七の賀に

千代ませといのる心に久しとも
　たもはさりけり君かよはひを

溪聲即是廣長舌山色豈非清淨心の
こゝろにて身延の山を折句として

見るからにのりの心そふくまるゝ
　やまへの紅葉ましみつのこゝろ

新年の歌の中に

いたつらにむかふもちひの增鏡
　まさぬはたのか學ひなりけり

年ころ新聞を見ずして
勅題をも知らざりければ

世のうさを聞かしとたもふ心より
　知らてすこしぬ御代の手ふりも

冬聲

けさはまたかけひの水も音たえて
　雪氣のそらにこからしそふく

身延に詣で、

古童庵

名も美しい身延の御山は、聖祖が九ヶ年の棲神靈窟であり、また宗門發軫の道場である、開宗以來第六百六十五年の春を迎へ、宗門萬代を祝ぎ奉つて、座ろに聖祖の第三國諫と身延御入山とを思ひ浮んで、其の御人格の崇高と御山の尊ふとさに識らず合掌低頭の姿と化けた。

御堪氣を蒙られた宗祖は、龍の口の土壇場も寂光の都と化し、今又天外の孤嶋北海の塞山佐渡が島に流罪とおられ、配所の詫び住ひも三ヶ年の月日を送られた、しかし天は孤島の妙法廣宣を囑して其の功の成るに及んで、之を本土に呼び返さう